

川 あ そ び 情 報 誌

九州かわとも

第10号

TAKE
FREE

川 あ そ び 情 報 誌
九州かわとも



九州の川遊び情報募集中!



九州の川で色々な活動をしている皆様!「九州かわとも」編集局まで、ぜひ情報をお寄せください。お待ちしております。

川あそび情報誌「九州かわとも」事務局
(一社) 北部九州河川利用協会内

TEL : 0942-34-6733 FAX : 0942-32-6977

MAIL : kawatomo.mk@gmail.com

第8回九州川の風景フォトコンテスト・受賞作



最優秀賞:遠賀川(福岡)



優秀賞:季節を感じる写真(春)・
国土交通省管理河川賞/嘉瀬川(佐賀)



優秀賞:季節を感じる写真(春)
/瑞梅寺川(福岡)



優秀賞:季節を感じる写真(春)
/一本松川(福岡)



優秀賞:季節を感じる写真(冬)
/本明川(長崎)



優秀賞:季節を感じる写真(冬)
/蓬萊川(熊本)



優秀賞:季節を感じる写真(冬)
/関川(熊本)



優秀賞:季節を感じる写真(春)
/ニツ川(福岡)



優秀賞:季節を感じる写真(春)
/柳川(福岡)



優秀賞:川の楽しさ・魅力を感じる写真
/球磨川(熊本)



優秀賞:川の楽しさ・魅力を感じる写真
/日之影川(宮崎)



優秀賞:学生賞/一本松川(福岡)



優秀賞:川の楽しさ・魅力を感じる写真
/巨瀬川(福岡)



優秀賞:スマホ賞/高良川(福岡)



優秀賞:カッコイイ!河川工事の写真
/山国川(大分)

【読者アンケートフォーム】
プレゼント応募は12/15まで



当選者は、商品の発送をもって
かえさせていただきます

川あそび情報誌
九州かわとも 「やっぱり川へ行こう」

2025年秋号(Vol.10)
2025年11月10日発行

編集発行:「九州かわとも」編集局

第7回九州川の風景フォトコンテスト 最優秀賞:山中溪谷(福岡)

■「川の応援団」

九州地方整備局 河川部長 大野良徳 氏

■ 川の先駆者

本明川オピニオン懇談会
菊池川流域連携会議

■ 流域治水

■ 流域じまん

SPIRIT COLOR(福岡・筑後川)
さがクリークネット(佐賀・松原川)
阿蘇立野ダム周辺かわまちづくり協議会(熊本・白川)
山国どぶろく製造所(大分・山国川)
おおよどがわりビング(宮崎・大淀川)
湧水町力ヌー協会(鹿児島・川内川)



第3回

九州河川協力団体連絡会議

みらい会議

筑後川流域連携会議

吉田氏



「河川協力団体活動事例紹介」



九州地方整備局 河川部
中島河川環境課長

1日目 講習会

「九州地域連携の歴史と

九州河川協力団体の概要」



みらい会議への想い
九州河川協力団体連絡
会議 池辺代表



九州地方整備局 河川部
中元河川調査官

開会式

令和7年5月31日

「熊本YMCA阿蘇キャンプ場」
(熊本県阿蘇市)

「みらい会議」は、地域における河川協力団体の活動や連携について理解を深め、各流域での取り組みを活性化することを目的に開催されています。

第3回目となった今回も、九州各地の河川協力団体の皆さんと、九州地方整備局の若手職員が参加し、交流や研修を通じて親睦を深めました。

ワークショップ

テーマ「笑顔の集まる川づくり」

池辺代表から「川づくりは長期的な目標が必要で、答えは一つではない」との投げかけがあり架空の川を題材に6グループで討議を実施。発表会では、活発な質問が飛び交いました。



2日目 実地研修

令和7年6月1日

「水辺の学習館 ゆめほたる」

(熊本県山鹿市)

河川協力団体が誇る「川の達人」の皆さんが中心となり、防災活動に役立つ実践的な知識を習得する貴重な場となりました。



参加者の声

○川に入り、実際に体験してみないと分からないことがあると実感した。

○普段は関わりが少ない他事務所や河川協力団体の方と交流でき、貴重な経験になった。

○国交省が河川改修やダム建設にあたり、地域住民の思いや希少生物のことまで考えていることを知ることができた。

といった感想が寄せられ、民と官が一緒に学び合い、九州の流域で暮らす人々に寄り添って、より良い川づくりや安全・安心を考えた二日間。若手世代が主体となって地域と河川の未来を真剣に考える機会となりました。

九州各地で、

「川と街をつなげる」 「川と人をつなげる」

取り組みが始まっています



第8回九州川の風景フォトコンテスト
優秀賞：川の楽しさ・魅力を感じる写真／白川（熊本）

■ トピック	九州河川協力団体連絡会議	みらい会議	2
■ 川の応援団			3
国土交通省 九州地方整備局 河川部長／大野 良徳 氏			
■ 川の先駆者			
・本明川オピニオン懇談会			5
・菊池川流域連携会議			7
■ 流域じまん			
・SPIRIT COLOR(福岡・筑後川)／・さがクリークネット(佐賀・松原川)			9
・阿蘇立野ダム周辺かわまちづくり協議会(熊本・白川)／・山国どぶろく製造所(大分・山国川)			11
・おおよどがわりビング(宮崎・大淀川)／・湧水町カヌー協会(鹿児島・川内川)			13
■ 流域治水について			15
■ 水辺で乾杯			17
■ 活動団体紹介			19
・グリーンはな走会(熊本・緑川)／・KRAP(宮崎・川内川)			
■ トピック	・球磨川ラーメン(熊本・球磨川)／川辺の風景マニアッククイズ		20
■ 編集員が見つけた川の風景／編集後記			21
■ 協賛企業一覧			22

川の応援団

国土交通省 九州地方整備局

河川部長 大野 良徳氏



人がつなぐ川とまち

私の出身は松浦川上流域の佐賀県武雄市山内町で、一級河川松浦川と六角川の2つの源流の町で育ちました。

子どものころは田んぼの手伝いをして、近くの小さな川で魚釣りや沢蟹捕りをしたり、泳いだりしていました。

川は釣りや探検などの「遊び場」であり、生活の一部として身近にありました。この「川遊び」体験を通して、水深が異なる場所や潜ってはいけない危ない場所があることを学んだと思います。

水を託された日

本格的に河川に携わったのはこの仕事についてからです。

最初は、筑後川のダム統合管理事務所での勤務でした。ここでは「低水管理」という水管理を行い、河川の流量が少なくなると上流ダムから水を補給して流量を確保するというものでした。



筑後大堰(水資源機構筑後川局 提供)

筑後川には「筑後大堰」という大きな水資源開発施設があり、福岡都市圏の水道用水の約3分の1がここから取水・導水されています。大河川を持たない福岡都市圏にとつては極めて重要な施設ですが、筑後川下流域、特に有明海の漁業者の方々からは、「流域外への導水」に対して強い反発もありました。そのため、各県知事も交えて議論が重ねられ、最終的には大堰下流へ毎秒40m³の流量を確保する約束が交わされ、私はその河川流量の管理を担当していました。

この「低水管理」は非常にシビアな業務で、毎日欠かさず確認することが求められて

いました。正月の帰省時に水不足の兆候があり、雪の降る中を急いで事務所に戻り、上流ダムからの放流を指示したこともありました。こうした経験を通じて、水資源の開発や管理がいかに多くの人々の暮らしに直結しているかを学ぶことができました。

語らいから生まれる未来

初めて、住民団体の方々と「川について直接語り合う」という貴重な経験をしたのは、長崎県の本明川でした。

今でいう「多自然川づくり」が始まった頃です。石積み護岸といった自然に配慮した整備が進められ、本明川がその先駆けだったと思います。地元の「本明川オピニオン懇談会」の皆さんと議論を重ねながら、工事内容を詰めました。酒を酌み交わし、「この川をどうするか」を熱心に語り合い、河川が町の一部として人々の生活に深く結びついていることを実感しました。

本明川では子どもたちが飛び石を渡って遊び、町の人々が日

常的に川に親しんでいる姿を見て、「まちづくりの中で河川をどう活かすか」が大事なのだと強く感じました。これが、私にとって新たな河川との大きな出会いだったように思います。

ちょうど30年ほど前、懇談会の皆さんと「町から川に降りられるような緩傾斜の護岸を整備しよう」と図を描いたのですが、先日「天満・永昌地区かわまちづくり」として実現していることを知り、夢が形になっていて感激しました。



本明川に整備された駅前公園から続く護岸

これらの経験を通じて、「河川はまちの一部である」という考え方を持つようになり、それ以来、「河川の中だ

けを見るのではなく、町全体を見よう」と言い続けています。

地域と築く安全

武雄河川事務所では、松浦川の整備計画見直しに着手するとともに、完成したばかりの「アザメの瀬」モニタリングを地元の方々と協力して実施しました。また、水害が発生して災害復旧対応も担うことになりましたが、地元区長の方々と協議して「地形特性に基づき、あえて溢れさせながら洪水を流す」という方針を共有しました。

高さ1m程度の低い堤防とし、大雨が来れば越水する可能性はありますが家屋は浸水しないように設計しています。高い堤防は堤防決壊時の被害は大きくなりますが、低い堤防であれば水位がゆっくりと上がって下がるため、田んぼへの影響も比較的小さくて済みます。現在でいう「流域治水」に近い考え方でした。

治水の責任を担う

それから、筑後川河川事務所



白川「緑の区間」にて行われる白川夜市

地域と育む水辺

水資源開発に関わってきた立場から、「自分がやらなければ」という思いが強かったです。事業を進めることで地域の治水安全度は必ず向上し、社会貢献できるという確信がありました。もちろん環境への配慮も必要で、環境への影響を最小限に抑える形で事業を進められると考えています。

熊本に赴任した頃、「ミズベ

リングプロジェクト」が始まりました。平成27年、九州北部豪雨(平成24年)の災害復旧を経て、白川「緑の区間」がプレオープンしました。完成式典に合わせてマルシェを開催し、商店街の方々とバーナーとして、地元区長さんや地域団体にも協力いただき、第1回のイベントは多くの方々に積極的に参加していただきました。今でも多くの方と交流が続いており、河川空間のオープン化が「白川夜市」として定着しています。

その後、遠賀川では多様な団体と出会い、地域ごとの独自の取り組みに感銘を受けました。特に、「川づくりは人づくり、人づくりはまちづくり」という理念は、私の考えと通ずるものでした。私たちは河川管理者にとつても、地域活動との協働が支えとなり、互いに良い影響を与え、成長しあえる関係が理想的です。

自由が生むつながり

現在の皆さんの活動を拝見

活動の目的もさまざまで、環境学習を重視する団体もあれば、まちづくりや地域活性化を中心とする団体もあります。それぞれが自分たちの思いを持ち寄り情報交換や協力をしながら活動しています。皆が同じ方向に進む必要はなく、自由で多様性があることが九州の大きな魅力で、ここまで幅広い活動が相互に繋がっている地域は全国的にも珍しいと思います。

私たちの目的は、地域の生活環境を向上させ、安全・安心を高めることです。河川の整備や利活用はそのための手段にすぎません。今後とも河川協力団体や地域の皆さんと「地域を良くするために何ができるか」を一緒に考え、取り組んでいきたいと思っています。

川とまちをつなぐ、
学びと語らいの場

はじまりの想い

長崎県諫早市街地を流れる本明川を「もつと親しみやすく、未来へつなげたい」との地域の想いと、これからの河川整備は住民の意見を聞きながら進めたいという河川管理者（国土交通省）の想いが重なり、平成7年に公募により集まった方々11名で「本明川オピニオン懇談会」が発足しました。

多彩な活動の軌跡

多自然川づくりを軸に、市民と行政が共に考える場として始まり、平成13年には「本明川夢プラン」を市長へ提案。本明川流域、小野用水の歴史探訪や源流調査、河川敷の野草を使った料理など、冒険心あふれる取り組みや散策路・三角公園のかわまちづくりにも住民代表として参加されました。

眼鏡橋や水車の記録、水質調査や川の通信簿、子どもたちとの川遊びが毎年定番の活動で「さるくマップ」「小野用水マップ」「飛び石さんぽみち」の三大マップも作成されました。

ゆるやかな学びの場

毎月第3木曜の夜に開催され、回数は290回を超えました。行政や専門家の話を聞きながら、無理なく参加できる「学びの場」として、世代を超えた交流が続いています。ときに議論を交わしながらも、互いを尊重し合う空気が、活動の原動力となってきました。

未来へ向けて

「30年だからって特別なことはないです。みんなで仲良く、『次、何する？』って決めていく。肩肘張らず自然体で続けることが大事。」ほわつとした空気が、原動力かもしれません。」そんな声が印象的でした。

諫早大水害の記憶を受け止めながら、地域の夢を描き、まちづくりを楽しむ。飾らない暖かさと絆に包まれた「本明川オピニオン懇談会」は、これからも川とまちの未来を見つめ続けます。

本明川夢プラン

参考資料



すばらしい本明川を子どもたちに...

令和7年10月24日「オピニオン懇談会30周年の集い」が開催されました



本明川について語り合った、行政の方も含めた歴代のメンバーと中原元会長、平尾さん(91歳)や宮崎さん(83歳)も参加され、当時の話で盛り上がりました。



各マップはQRコード
からご覧ください



リニューアルされた駅前公園を走りまわる子どもたち



飛び石さんぽみちで遊ぶ子どもたち



自生する野草グルメ

ほんみょうがわ
本明川オピニオン懇談会

30
周年

長崎県

想い出
とある日の
オピニオン懇談会より



遊歩道

山村さん
最初に関わっていただいたのが、遊歩道かな。

吉岡さん
遊歩道は、出来上がった随分たつけど大成功じゃないかな。本来は、河川敷の管理用道路なんだろうけど、あそこ歩く人多いからね。

中島さん
気持ち良いもん、歩いていて。

本来は芝でキレイだったから、コンクリートになると違和感あるかなと思ったけど、全然だったね。

本明川に自生する野草グルメ

楽しかったんですけど、すごく大変でした。山のようにある野草を専門家の宮崎先生が振り分けてくれて、男性の方たちが天ぷらにして。ドクダミは食べられるんですけど、やっぱり癖はありますね。

秀島さん
あとは、ピザとかヨモギのうどん、それに和え物、いろんな料理を作りました。

支川を遡っての源流調査

名前もないような滝を網で降りたよね。

源流は大変でした。始めはみんな元気だったけど、気候も悪かったから寒くて寒くて、最後、女性の方とは可哀そうだった。

セメント背負って行ったよね。

源流の碑を建てるのに、現地ではセメント混ざって、穴を掘って流し込んで建てたりしたね。

飛び石さんぽみち

飛び石の数でいうと、日本一じゃないのかな。

今ある飛び石の工事をする時に見学させてもらって、渡る人のことを考えて石の角を削ったりされていたんですよ。自分たちは普通に利用しているけど、そういう小さなことにも気を使ってもらってるんだって初めて知りました。

私は、諫早大水害の時にどこまで水が来たとか、飛び石がこれだけあるのも知らなかった。ここで知ることが出来て、すごく勉強になる。

- 川の先駆者 -

菊池川流域連携会議 20周年特集

菊池川の水が
飲めるように



菊池川流域連携会議 設立20周年記念事業
令和6年2月3日 天聴の蔵



魚をとってきくちがわを観察する体験塾



菊池川クリーン作戦



菊池川流域地域資源シンポジウム

流域を越えた地域の絆 3団体から始まった流域の連携

2023年に設立20周年を迎えた「菊池川流域連携会議」は、菊池川流域内において川を活かした地域づくりや川遊びのほか、川をテーマにした環境問題に取り組むなど川を中心とした活動を行っている団体等が集まり、流域内の地域連携ならびに地域活性化を図ることを目的として結成しました。

現在は14団体が参加しています。が、始まりはわずか3団体でした。当時の国土交通省菊池川工事事務所からの「流域全体でまとまった組織があれば良いな」という声をきっかけに、上・中・下流それぞれの団体が協議を重ねた末、2年越しに連携会議が誕生しました。

共通の目標を目指す仲間

流域の環境と条件が異なる中で、共通の目標として掲げられたのは「菊池川の水を飲めるようにする」ことでした。これを機に、上流の水質の良さと下流での汚れに対する意識の違いを乗り越え、流域全体で協力する姿勢が生まれました。

で、目の色が変わるんです。自然の中での体験が、彼らの心に残るものになると実感しました」と語る皆さんから、活動の意義が伝わってきます。

強みは顔が見える距離感

菊池川の長さは約71kmと一級河川では、比較的短い河川です。上流から下流まで日帰りで見ることができ、流域内で集まって活動しやすい。

「顔が見える関係を築きやすいのが菊池川の魅力」とのこと。会議も対面で行いやすく、意思の疎通がスムーズであることなど、地域のつながりが活動の基盤となっています。

連携と発信力で描く未来への展望

今後の活動については、行政との連携強化や外部への発信が課題として挙げられています。

「頑張るほどに各々の活動がやりやすくなって、人が離れていくのは避けたい。だからこそ、外からの応援や見学など、ゆるやかな関わり方も歓迎したいです」と語る会長の言葉。

また、「一緒にキャンプや河川の清掃をすることで、仲間意識が芽生えました。分かり合うには、やっぱり一緒に汗をかくことが大事ですね」と語る会長の言葉には、活動を通じて築かれた実績が、信頼という形で着実に表れています。

川の体験が宝となる

連携会議の主な活動としては、8月に行っている魚の観察会やカヌーに乗っての河川調査、ブラジルチドメグサ駆除などの清掃活動や『九州「川」のワークショップ』への参加、定期的な連携会議（役員会・総会）の開催・運営など様々であり、川を使った地域活性化と団体間の情報交換・情報共有及び各団体の発展等を図っています。

これまでのさまざまな活動の中でも特に印象的なのが、子どもたちを対象とした活動です。熊本県の県民文化祭をきっかけに始まり、1泊2日の川下りを通じて、上流から下流までの川の姿を体験する取り組みなどが行われてきました。

「川に入ったことのない子どもたちが、魚を捕ったり泳いだりする中

葉には、開かれた活動への思いが込められています。

川とともに育まれた記憶

「昔は川しか遊び場がなかった。泳いだり魚を捕ったり、ターザンごっこをしました。危険もあったけれど、それも含めて川の魅力でした」と語る皆さんの思い出には、自然との深いつながりが感じられます。

今の子どもたちにも、そんな体験をしてほしい—その願いが、菊池川流域連携会議の活動の原動力となっています。



前会長：井口圭祐さん、会長：村上正八さん

【菊池川流域連携会議 構成団体】

- | | |
|-----|--|
| 菊池市 | 菊池川キッズ探検隊、
竜門倶楽部、
竜門ダムで遊び学ぶ会、
菊池法人会青年部会、
子どもの未来を考える会 |
| 山鹿市 | 下町惣門会、かわんたみ、水辺プラザかもと、
菊池川漁業協同組合、菊池川自然塾、
古里の自然を守る山鹿ホテルの会、
菊池川育てネット |
| 和水町 | (一社)ネイチャー・サイエンス スクール |
| 玉名市 | 菊池川おかわの会 |



↓公式HP



↑ 開会の挨拶をされる三浦さんご夫妻

子どもたちが主役のマルシェ 「集まれ！川辺であそぼう」

「川は危ないから近づかないように」そんな言葉を聞くことが増え、川で遊ぶ子どもたちの姿は少なくなってきました。昔は、川辺で水に触れたり遊んだりしていたのに、今では川が遠くなくなってしまったように感じます。

そんな中、久留米市の筑後川沿いでたくさん子どもたちが集まるイベントが開かれました。企画したのは、三浦さんご夫婦を中心とした子育て世代のチーム「SPIRIT COLOR」。「子どもたちが自然の中でのびのびと体験できる場をつくりたい」という思いから始まったこの取り組み。川のそばで過ごす楽しい時間に、集まった人々の笑顔があふれていました。

五感であそぶ体験

このイベントのテーマは「子どもたちが主役」。見て、聞いて、触れて、感じて―五感をたっぷり使って、心が動くような体験を届けたい。そんな願いが込められています。

青空の下、10mの大きな紙に絵の具で自由に描くカラーペイントでは、子どもたちが思いきり表現する姿が見られました。



会長 川崎 康広さん

弁当を食べたり、飲み会をしたりと、イベントでは生まれない自然な交流の場が生まれました。「まちづくりは、想定外の出来事が起こるからこそ面白い」と川崎さん。川床でくつろぐ学生と街ゆく人が語り合う姿に、佐賀ならではの豊かさを感じたといいます。

目指すのは『日本のベネチア』

水辺を日常的に使うことで、川への関心や清掃への意識も自然と高まり地域の文化として根づいていくことを願い、「無理をせず、出来る範囲で続ける」ことを大切に活動を続けています。今では大学や高校、自治会、神社などと連携しながら活動の輪が広がっています。

佐賀市の水路を「心の豊かさを育む場」として活用したまちづくりには思いが詰まっています。川崎さんの夢は、佐賀市を「ベネチア」のような町に戻すこと。水路という資源を活かし、建物の裏側から舟に乗って、目に映る景色と会話を

楽しみながら次の店へ移動できるような、ゆつたりとした水辺の暮らしが広がる町を思い描いています。



松原川de川床プロジェクトHP



facebook

さがクリークネット

水路から始まるまちづくり

佐賀市は、平野の隅々にまで水路が張り巡らされた「水のまち」。

先人が「水」と寄り添う暮らしを作り上げてきた城下町の魅力を再発見し光を当て、水路を活かしたまちづくりに取り組みんでいるのが、「さがクリークネット」です。

きっかけは2015年のシンポジウムでの「二度、水路に入ってみよう」という一言でした。市の協力を得て、カヤックで水路を進むと、歴史的な石垣や建物、自然が残る美しい風景が広がっていました。佐賀の文化が全部詰まっている場所、「これを活かさない手はない」と、まずはみんなで船着き場をつくり、その後カヤック体験や和舟の運航、水辺のマルシェなど、多彩な活動を展開してきました。

イベントから日常の実現へ

活動は当初、イベント中心でしたが、コロナ禍を機に「普段使い」へと舵を切ります。水辺で遊びたいという西ノ首さん（会員）からの提案で自由に使える「川床」を松原川に設置し、交流できる仕掛けをすると、住民や学生がおしゃべりしたり、お

れました。服が絵の具で汚れても、親子で笑い合いながら過ごす時間は、きっと忘れられない思い出になるはずです。

筑後川に咲く、笑顔と希望の輪

「MY STAR MARCHE」と題した第2回のイベントは、筑後川にぎわい創り応援団や、筑後川防災施設「くるめウス」、佐賀県の障害者就労支援B型事業所「PICFA」の協力のもと、令和6年5月25・26日の2日間にわたり開催されました。子育て世代が中心となって企画されたイベントということもあり、授乳やおむつ替えができる保育スペースを完備し保育士さんも常駐するなど細やかな配慮が施されています。

川辺の会場には子どもたちの笑顔が溢れ、それにつられるように大人たちも自然と笑顔に。約8千人の来場者は、終始、穏やかで温かな雰囲気包まれていました。

地域にとってかけがえのない存在である子どもたちに地域の価値を伝えるが、未来の子どもたちに誇れるそんな地域づくりを目指して、この活動は、これからも続いてゆきます。



Instagram



「松原川光と夜のさんぽ道」 灯籠は前日に市民が絵付け



おおいた なかつ
大分県中津市
／山国川

山国どぶろく製造所

流域じまん
大分

「山の国」の
水と清流米で生まれる、
切れのある芳醇などぶろく」

山国川の源流と自然に囲まれた静かな山里。ここに「どぶろく」をつくる「山国どぶろく製造所」があります。ホタルの舞う田んぼで、地元の水と水を使ってお酒づくりを始めました。地元で自生する椿が好きなご両親への想いから「山椿（やぶつばき）」と命名しました。

地域の素材を活かす

「お米作りに加えて、何か面白いことができないかな」と思い立ち、熊本県小国町でどぶろくづくりを学び、税務署に何度も足を運び許可を取得しました。

地元の山国川の清流で育てたヒノヒカリ米と地下水で完成した辛口のどぶろくは、すっきりとした味わいが魅力で、訪れる人に好評です。熱処理をしておらず、開栓後も生きた麹菌が発酵を続け度数が上がるため飲みすぎには注意が必要です。

お酒を飲めない方にも届けたい

内閣総理大臣による「やまくにどぶろ

流域じまん（熊本・大分）

川とともに豊かな未来へ

地域では年に一度、協力して河川や道路の清掃を行っています。「子どもたちにも川で遊ぶ楽しさを知ってほしい、生活になくてはならない水と豊かな自然がそのまま残るように」と願う野村さん。

自然とともに暮らし、地域の恵みを活かしたものづくりを続ける姿には、川の恵みや自然への感謝と敬意の思いが込められています。

読者
プレゼント

アンケートに
回答いただいた方
の中から抽選で
あま酒「山椿」を
3名様にプレゼント。
詳しくは
裏表紙をご覧ください



公式Webサイト



あま酒3種：『白』赤米（精米）使用。『もち』もち米使用。『紅』赤米（玄米）使用



インタビュー：杜主 野村 彰さん

阿蘇立野ダム周辺 かわまちづくり協議会



くまもと みなみあそ
熊本県南阿蘇村
／白川

流域じまん
熊本

※「タテット」を拠点としたガイドツアー

阿蘇ジオパークガイド協会に所属するガイド（ジオパークの魅力に触れ、理解を深めていただくために、専門的な知識を学び、認定を受けたガイド）の皆さんが案内人となり、阿蘇カルデラの玄関口である立野峡谷の魅力と阿蘇立野ダム等の白川の治水、熊本地震の原因となった布田川断層、地震の被害や復旧・復興などを学べるルートの整備と併せて社会実験として実施予定。

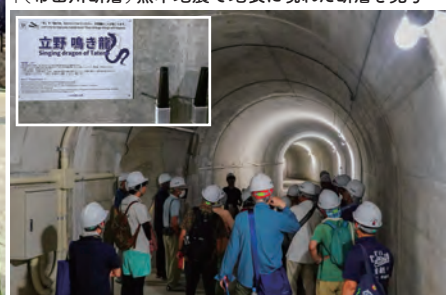
↑（ダム貯水池内）洪水調節専用の流水型ダムのため、ツアーでは貯水池の中に入ることができ、立野溶岩の柱状節理を間近に見ることが出来る



↑（ダム右岸側から）ガイド風景



↑（布田川断層）熊本地震で地表に現れた断層を見学



↑ダム右岸側のリムトンネル内（『立野鳴き龍』体験）

阿蘇の自然と
人のつながりを感じる場所へ
火山の力と地震の破壊力、
ダムを守る力を感じられる」

「命の水」の流れる川と南阿蘇の魅力

南阿蘇村は、阿蘇五岳と外輪山に囲まれた南郷谷に位置する自然豊かな場所です。南郷谷の中心を流れる白川は、阿蘇山の伏流水を源に、11の湧水群の水を集めながら、立野峡谷で黒川と合流し有明海へと流れていきます。その中でも「白川水源」は、阿蘇の自然と人々の暮らしを支える「命の水」として知られ、毎年多くの観光客が訪れています。

地震からの再出発と協議会の誕生

しかし、平成28年（2016年）4月に発生した熊本地震は、南阿蘇村に大きな爪痕を残しました。特に立野峡谷周辺では、道路表面にズレが生じて水源地からの給水管が破損、暮らしに欠かせないライフラインが寸断されるなど、住民の皆さんは長い避難生活を余儀なくされました。

そのような中、令和6年（2024年）3月に完成した「阿蘇立野ダム」

を村の新たな観光資源とし、地域を活性化するため「阿蘇立野ダム周辺かわまちづくり協議会」が発足しました。下部組織である検討部会で具体的な活用方法を検討しながら、立野地域を元気に、そして魅力ある場所として発信していく取り組みが始まっています。

協議会では、整備を進めている2つのエリア、白川上流域を「ダム・拠点エリア」として、子ども向けの水辺学習や、大人向けの「タテット」を拠点としたガイドツアーなどを企画し、白川と黒川の合流地点を「清流エリア」として、キャニオニングやキャンプ、釣りなどのアウトドア体験を楽しめるように準備しています。

立野の今を伝え、未来へつなぐ

今後は「タテット」（阿蘇立野ダム展望施設）を中心に、周辺の火山博物館や震災ミュージアム等の、観光スポットを巡るツアーなど、地域の魅力を発信できる、さまざまな取り組みを実施する予定です。そのような取り組みを通して、地震で村を離れた人々が再びこの地に戻ってきてくれることを願っています。

阿蘇立野ダム展望施設「タテット」



↑湧水町川下り体験の様子



↑鹿児島国体会場の様子



*スラローム＝ゲートを通過しながら下る競技
ワイルドウォーター＝速さを競う競技

湧水町カヌー協会

かこしま
鹿児島県
ゆうすい
湧水町
／川内川

↑指導の様子 日本代表 矢澤亜紀選手(後ろ中央)と久美田さん

自然と人の想いがつくる

く湧水町をカヌーの聖地に

川内川の上流、鹿児島県始良郡湧水町の「轟の瀬」は、昔からダイナミックな流れを保つ自然豊かな場所です。かつては岩肌が敷に覆われた野性的な川でしたが、令和2年の鹿児島国体をきっかけに整備が進み、今では全国からスラローム、ワイルドウォーターの選手が集まるカヌー競技の聖地となりました。ここで活動される「湧水町カヌー協会」の植林会長にお話を伺いました。

競技をする選手のために

平成9年の洪水をきっかけに、水害対策として山を削り川幅を広げた後、平成29年頃から「かわまちづくり」で整備が進みました。国体の開催が決まり、選手が安全に競技できるよう通路やスロープが設けられました。工事の図面は何度も書き直され、「選手のために」という思いが、関係者で共有されていたそうです。

この地でカヌーの練習を始めたのは、カヌー界のレジェンド神田橋貴子さん。平成27年から仲間とともに冬の寒空の下でも練習を重ねる熱意が、国

流域じまん
宮崎

OYODO GAWA LIVING!



インタビュー：今西 正さん

『おおよどがわりビング』 みんなのリビングルーム 川とともに始まった社会実験

宮崎市を流れる大淀川。その河川敷を舞台に、地域の人々が川とふれあい楽しむイベント『おおよどがわりビング』が開かれています。川辺を日常の中で気軽に活用してもらおうと始まった社会実験で、2019年11月に橘橋の下で初めて開催されました。大雨と強風に見舞われながらも多くの来場者が訪れ、「この雨が川を育んでいて、イベントも自然に寄り添う」という思いが、大切な考え方となりました。

知られざる川辺の魅力を発見

その後、会場を円形ステージに移すと、川沿いの景色や夕陽、鉄橋を渡る列車など、これまで気がつかなかった川辺の魅力が見えてきました。訪れた方からは「初めて水辺を歩いた」という声もあり、大淀川の川辺の空間は参加された市民の皆さんに新鮮な体験をもたらしました。

イベントでは、ヨガやSUP体験、ストリートスポーツ、ペット向けのブースなど、参加者の声を取り入れながら内容が進化（深化）していきます。

た。特に犬と一緒に訪れる方が多く、散歩の途中に立ち寄ることのできる場として親しまれています。

日常に溶け込む川とのつながりへ

『おおよどがわりビング』は、単なるイベント開催に留まらず、「人と自然」「川と街」「人と人」をつなげる河川敷を活かした「まち」の未来を考える場となっています。行政と民間が協力し、イベントチラシ等のデザインやインスタグラムの立ち上げなど、企画・運営にも工夫を凝らしています。

「川はみんなのリビングルーム」が由来のネーミングには、川辺を日常の一部として誰もがくつろげる場所になりたいという願いが込められています。

今後は、月に一度の小さな開催も視野に「イベントが特別なものではなく、日常の風景になるように」という今西さん。川の上流から下流まで、「人と自然」「川と街」がつながる場として、市民の皆さんが、それぞれに川の楽しみ方を見つけられ『おおよどがわりビング』が継続・発展していくことを願っています。



@OYODOGAWALIVING



マスコットキャラクター
カワナガレユタカ

みんなが使える川へ

体会場誘致の原動力になりました。地元でも「湧水町カヌー協会」が再始動し、審判員の育成に力を注ぎました。国体当時30名いた会員は現在15名ですが、ベテランの有資格者が在籍し、九州各地の大会運営も支えています。

川沿いの通路は地域の散歩道としても親しまれ、艇庫には多目的トイレも完備しています。車椅子でも水辺に近づけるため、パラカヌーの開催も可能です。自然と人の思いが融合したこの場所は、まさに「カヌーの聖地」と呼ぶにふさわしい環境です。2027年（令和9年）には、日本のひなた宮崎国スポが当会場で開催されます。現在、地元の女子中学生、久美田さんが出場を目指して練習に励んでいます。

「今後は子どもたちに、もっとカヌーを楽しんでもらいたい」と植林会長は熱く語られます。川遊びをきっかけに未来のオリンピック選手が育つ希望を感じながら、湧水町を流れる川内川は、沿川の皆さまの多くの夢をのせて流れ続けていました。



会長：植林 伸洋さん

— 自分事化の取り組み —

九州地方整備局
流域治水推進室

流域治水推進室

(題字：流域治水推進室 原田 佳奈 書)

1. 流域治水とは

『流域治水』という言葉聞いたことはありますか？

「流域」とは、「大地に降った雨が地表を流れたり、地中に染みこんだりしながら川に流れ込む範囲」を言います。みなさんの住む家もどこかの流域にありま
す。また、「治水」とは、「洪水によって起こる災害から河川の周辺に住む人々や土地を守るこ
と」です。

この線の内は全て 流域

支川 本川 支川



河川管理者はこれまでも、引堤(川幅を広げる)や河道掘削(川底を掘り下げる)を実施し、洪水時の河川の器(洪水を流せる大きさ)をより大きくしたり、ダムや遊水地等を整備し、洪水を一時的に貯めたりすることで、洪水時の河川の水位をできるだけ下げることの「治水」対策を行ってきました。

近年、気候変動により雨の降り方が激^{げき}甚化しており、全国各地で毎年自然災害が発生しています。洪水の発生する頻度も約20～30年後には約2倍に増えると予測されています。

そこで、この気候変動への対応として、これまで行ってきた「治水」対策（事前防災対策）の加速化に加え、治水計画を「気

民間企業への普及啓発、

BCP作成支援の取り組み

～主体を増やし、被害の軽減へ～

熊本河川国道事務所では、水害による地域経済へのダメージを低減するために企業・団体と連携した流域治水の自分事化の取り組みを進めています。

具体的な事例として、昨年度より「水害版企業BCP」の作成支援を実施しています。水害版BCPとは、浸水により施設や組織、人員が被災した状況を想定し、水害時に迅速かつ適切な対応をできるようにすることを目的として作成するものであり、以下のようなことが期待できます。

- ・ かけかえのない従業員や顧客の命を守る事ができる
- ・ 被害拡大の抑制や早期復旧ができる
- ・ 被災後、早期にサービスを提供することができる
- ・ 企業の価値向上や社会貢献が期待できる

昨年度は御船町と連携し、(株)コストコホールディングスのＢＣＰ作成支援を実施しました。今年度は熊本市と連携し、(株)鶴屋百貨店のＢＣＰ計画の作成支援に取り組んでいます。

今後さらに、熊本市内をはじめ、県内各地の企業へと取り組みを広げるべく、比較的簡易に、水害版企業ＢＣＰが策定できるように「基本シート」でつ

2. 九州における

流域治水の取り組み



↑ 流域治水の具体例

候変動による降雨量の増加を考慮したものに、見直すとともに、これまでの「治水」対策だけでなく、みなさんが生活する地域で雨水を貯める場所をつくったり、浸水リスクの高い地域では、建物の耐水化や家屋の移転などの住まい方の工夫（リスクに応じたまちづくり）を実践したり、また、水災害リスク情報の充実や避難体制の強化などを組み合わせながら、流域全体で水災害対策を一体的に進めていくことが重要です。

そのため、流域のあらゆる関係者（地域住民、企業、行政など）が協働して行う治水対策『流域治水』を推進しています。一人一人ができること、考えることから始めましょう。



↑ ARで浸水想定を確認



くる水害版BCP作成マニュアル」の作成を進めています。このマニュアルでは、水害版企業BCP策定の流れをステップ分けて、企業の方が比較的スムーズにBCP策定ができるよう工夫を行っています。今後も改良を進めつつ、企業への展開を進めていきたいと考えています。

3. 最後に

流域治水の取組を紹介するにあたり、資料提供にご協力いただいた方々へ心より御礼申し上げます。今回は、あらゆる関係者と協働した「流域治水」の取り組み事例を紹介しました。

読者の皆様に少しでも「流域治水」を身近に感じていただき、「自分事化」して、「自分の流域での取組を知りたいな」「やってみたいな」と思っていただけならば幸いです。今後も流域の皆様が安心して



暮らすために必要となる対策をとるに考え、九州各地の取組を紹介していきます。よろしくお願いします！

（流域治水推進室 津野 智彬）

九州では、各地でさまざまな流域治水の取り組みが進められていますが、今回は、緑川流域で実践されている、「流域治水の自分事化(携わる主体を増やす)の取り組み」に焦点をあてて、取り組みの一部をご紹介します！

～ 緑川の概要 ～

今回ご紹介する緑川は、その源を山都町の三方山に発し、御船川等の支川を併せて熊本平野を貫流し、下流部において、加勢川、浜戸川と合流し有明海に注いでいます。緑川流域は、歴史的な土木施設：かんがい施設や良好な自然環境、河川景觀を有しており、豊かな自然と文化的な資源に恵まれています。上流の「津志田河川自然公園」においては、キャンプやB・BQを楽しむ人たちで賑わいを見せており、地元の人々の憩いの場として親しまれています。また、国指定史跡に指定された「熊本藩川尻河港跡」など、文化・歴史に触れられる場所も数多く残されています。



→熊本藩川尻河港跡

→ 津志田河川自然公園



水辺で2025 乾杯杯

★★★
カンパイ



↑ 水辺で乾杯HP

令和7年7月7日
「川の日」7時7分
九州各地で乾杯の音が響きました



水害からの復旧・復興の願いを込めて～「全国初」川の名を冠したラーメン～



インタビュー：原田政勝さん

令和2年7月豪雨による洪水の朝、店の1階で寝ていた大將は、背中が冷たいので目が覚めたら、既に球磨川が氾濫し浸水が始まっていて、冷蔵庫などが水に浮いていたそうです。外への避難は危ないので、2階の天井を突き破って屋根に上がり、屋根の上で水が引くまで待ったそうです。



活動団体紹介・トピックス

お店を再建する時に、水害からの復旧・復興の願いを込めて、「水害のひどかつた八代、芦北、人吉が繋がるごつ、災害を忘れんごつ、球磨川のように長い麺（長長長めん…麺の長さ6m）で「球磨川ラーメン」を作ったとよ」と笑顔で語っていただきました。

ラーメンは、クリーミーな豚骨スープにコシのあるツルツルとした手打ち麺で、肉厚のチャーシューが3枚と海苔ときくらげがトッピングされており、美味しくいただきました。

※他にも川の名を冠したラーメンや料理を見つけた方は、編集局へ教えてください。

店舗名…大勝軒
(編集員 鶴木)
(熊本県人吉市紺屋町118)
(熊本県人吉市紺屋町118)

川辺の風景マニアッククイズ！

川の景色はみんなの原風景。ですが、その一つ一つは似ているようで、一つとして同じ風景では有りません。写真の風景は、どこの川の風景でしょう？難しい時はヒントを御覧ください。

【ヒント】

- ①治水・利水の名手が、入国後に最初に手掛けた治水施設（新たに270haの新田が開発されました）
- ②暴れ川に流されない堰を造るために、川の真ん中にあった青岩を巧みに利用して頑丈な堰を造りました。
- ③堰の近くには神社が有り、地震の際に巨石が落下して社殿を倒壊させました。奇跡的に御神体は被害を免れ、巨石はそのまま残すことで地震の被害を後世に伝える重要なものとなっています。



*青岩（かぶといわ）：大明神がこの地を巡回した時に、胃を脱いで投げたところ、この石になったとの言い伝えが残る巨岩。一説には、治水・利水の名手がこの大岩の頂に胃を被せて、『願わくはこの場が動くことのないようお守りください。』と祈ったので、このことから青岩というようになったとも言われています。

正解はP21へ

- 活動団体紹介 -

1 グリーンはな走会



熊本県宇土市 / 緑川



川に囲まれた地域を船で巡る6年生

走湯地域は緑川の最下流域に位置し、緑川と浜戸川に囲まれた特異な場所です。このため、地域住民は河川と深く関わっています。渡り鳥が飛来する季節には、地元の子どもたちに水辺から故郷を眺める体験を提供し、地域の自然の素晴らしさを再認識してもらうとともに、環境保全への意識を高めています。

さらに、緑川流域の活動にも積極的に参加し、「緑川の流域一斉清掃」では地元住民に呼び掛け、緑川旧河川敷で清掃活動を行っています。これらの活動を通じて、地域の自然環境を守り、住民同士の絆を深めることを目指しています。（寄稿…福成寺託真）

2024年より
河川協力団体
となりました



『2025緑川の日』一斉清掃活動

2 NPO法人KRAP



宮崎県えびの市 / 川内川



京町地区河川公園キャンプ場 SPARK



水辺で乾杯

2019年に任意団体として立ち上げ、2024年にNPO法人KRAP（クラブ）を設立しました。KRAPの名前の由来は、Kyonachi River Active Parkの頭文字をとったもの。京町温泉地区の河川や河川敷を含めた河川周辺を気ある場所にしよう！という思いが込められています。

私たちは普段、京町温泉郷を拠点に様々なイベントや地域の活性化事業を実施しています。隣接する川内川京町河川敷は、景観や環境も素晴らしく、観光資源になり得ると常々感じていましたので、どうにかリノベーションできないか



京町地区河川公園でのカヌー体験の様子

かと行政や各種団体に働きかけ、遂に念願が叶い、2025年3月に京町地区河川公園として河川敷が生まれ変わりました。

キャンプ場と多目的広場の2つの空間で構成されるこの河川公園を活用して、子どもから大人まで「まちを楽しむ、仲間を創る」空間にしていく、えびの市の観光地づくりの拠点として地域の魅力を伝える発信源にしていくことにより、真の「かわまちづくり」事業や「河川空間のオープン化」の取り組みへと発展させていきたいと考えています。（寄稿…井上成秀）

九州各地で「川と街をつなげる」↑「川と人をつなげる」取り組みが始まっています！

(株)新井組 九州支店

〒812-0011
福岡市博多区博多駅前3丁目19番5号

応用地質(株) 九州事務所

〒812-0018
福岡市博多区住吉3丁目1番80号

(株)オリエンタルコンサルタンツ 九州支社

〒812-0011
福岡市博多区博多駅前3-2-8

(株)九州開発エンジニアリング

〒862-0912
熊本市東区錦ヶ丘33番17号

(株)九州建設マネジメントセンター

〒812-0013
福岡市博多区博多駅東2-10-35

共和コンクリート工業(株)九州営業部

〒812-0025
福岡市博多区店屋町8-24

(株)建設技術コンサルタンツ

〒890-0007
鹿児島市伊敷台一丁目22番1号

砂防エンジニアリング(株)

〒350-0033
埼玉県川越市富士見町31-9

清水建設(株) 九州支店

〒810-0004
福岡市中央区渡辺通3丁目6番11号

(株)高崎総合コンサルタント

〒839-0809
久留米市東合川3丁目7番5号

飛鳥建設(株) 九州支店

〒810-0004
福岡市中央区渡辺通5丁目14番12号

西日本技術開発(株)

〒810-0004
福岡市中央区渡辺通1丁目1番1号

日本工営(株) 福岡支店

〒812-0007
福岡市博多区東比恵1-2-12

パシフィックコンサルタンツ(株) 九州支社

〒812-0012
福岡市博多区博多駅中央街7番21号

松本技術コンサルタント(株)

〒871-0161
中津市大字上池永1285-10

八千代エンジニアリング(株) 九州支店

〒810-0073
福岡市中央区舞鶴3-9-39

(株)ARIAKE

〒860-4108
熊本市南区幸田2丁目7-1

(株)大本組 九州支店

〒810-0041
福岡市中央区大名2-2-7

(株)川原建設

〒871-0434
中津市耶馬溪町大字樋山路38

(株)九州建設計画エンジニアリング

〒812-0011
福岡市博多区博多駅前1丁目19番3号

九州電力(株)

〒810-8720
福岡市中央区渡辺通2丁目1-82

(株)建設環境研究所 九州支社

〒812-0023
福岡市博多区奈良屋町2番1号

国際航業(株) 九州支社

〒812-0013
福岡市博多区博多駅東3丁目6番3号

三州技術コンサルタント(株)

〒890-0042
鹿児島市薬師1丁目6番7号

第一復建(株)

〒812-0006
福岡市博多区上牟田1丁目17番9号

中央開発(株) 九州支社

〒814-0103
福岡市城南区鳥飼6-3-27

(株)西技計測コンサルタント 九州営業所

〒826-0041
田川市弓削田見立3175

(株)日水コン 九州支所

〒812-0038
福岡市博多区祇園町7-20

日本振興(株) 九州支店

〒812-0013
福岡市博多区博多駅東2-5-21

(株)不動テトラ 九州支店

〒812-0011
福岡市博多区博多駅前4丁目1番1号

三井共同建設コンサルタント(株) 九州支社

〒812-0013
福岡市博多区博多駅東2-14-1

いであ(株) 九州支店

〒812-0055
福岡市東区東浜1-5-12

(株)奥村組 九州支店

〒805-8531
北九州市八幡東区山王2-19-1

技研興業(株) 九州営業所

〒812-0007
福岡市博多区東比恵2丁目19-18

九州建設コンサルタント(株)

〒870-0946
大分市大字曲936番地1

(株)共同技術コンサルタント

〒880-0036
宮崎市花ヶ島大原2361-1

(株)建設技術研究所 九州支社

〒810-0041
福岡市中央区大名2-4-12

五洋建設(株) 九州支店

〒812-8614
福岡市博多区博多駅東2丁目7-27

ジェイエイシーエンジニアリング(株)九州支店

〒812-0014
福岡市博多区比恵町1-1

(株)大進

〒890-0016
鹿児島市新照院町21番7号

(株)東京建設コンサルタント 九州支社

〒812-0016
福岡市博多区博多駅南2丁目12番3号

(株)西日本科学技術研究所

〒780-0812
高知市若松町9番30号

日鉄鉱コンサルタント(株) 福岡支店

〒820-0053
飯塚市伊岐須1-356

(株)ニュージェック

〒531-0074
大阪市北区本庄東2丁目3番20号

松尾建設(株)

〒840-0842
佐賀市多布施1丁目4番27号

牟田建設(株)

〒842-0103
佐賀県神埼郡吉野ヶ里町大曲1756

賛助企業の皆さまの暖かいご支援により、

今回、第10号を発行することができました。

紙面上ではありますが、編集チーム一同、心より御礼申し上げます。

都会のオアシス

くダム建設で誕生した水辺く

ここは、五ヶ山ダム（福岡県那珂川市）の下流に有る『五ヶ山クロスリバーパーク』、福岡市天神から車で1時間以内と近いこともあり、この日は、多くの家族連れで賑わっていました。この場所は、五ヶ山ダム建設（2017年完成）時に親水公園として整備されています。

この日は、五ヶ山ダムの放流している写真を撮影したくて訪ねましたが、川遊びする子どもたちの歓声が溪谷にこだましていました。五ヶ山ダムは、ダムの直下に遊歩道が整備されているので、季節によっては、ねむの木と放流の写真を撮影することができます。（写真は、7月初旬に撮影）

編集員／鵜木



編集後記

【お詫びと訂正】かわとも9号において、表紙および目次にて記載内容に誤りがありました。正しくは「玉名地域デザイン協議会」です。関係者の皆さまには、改めてお詫び申し上げます。

「九州かわとも」第10号編集後記

「九州かわとも」を楽しみに読んでくださる皆さまに、記念すべき第10号をお届けできることを心から嬉しく思います。今号も編集チームへ寄せられた情報を手がかりに九州各地の川辺を歩き、人々の声に耳を傾けました。そこには、地域を想い、夢を語り、まちづくりに真摯に向き合う多くの姿がありました。取材を重ねるたび、その真っ直ぐな思いに力をいただき、飾らない笑顔に癒やされています。

特集「川の実験者」では、仲間と共に歩んだ20年、30年の軌跡を紹介。さらに「流域味じまん」では、地域ならではの味と人の温かさをお届けします。そのほか、流域治水の取り組みでは、熊本県緑川の事例を紹介。あらゆる関係機関との地域連携、協働による備えを参考に、皆さまの地域での取り組みのきっかけとなれば幸いです。

また、今回は初のプレゼント企画もありますので、ふるってご応募ください。誌面を通じて、よりリアルで生き生きとした地域の魅力を発信していくため、QRコードからアンケートへのご協力もぜひよろしくお願いいたします。

今号の発行にあたり、ご協力くださった皆さまには心より感謝申し上げます。この一冊が、新たな出会いや繋がりきっかけとなりますように。九州の川には、まだ知られざる物語が数多く流れています。これからも、川を通じて広がる地域の魅力を皆さまと共に見つけ、伝えていけることを楽しみにしています。

「九州かわとも」編集チーム一同

